

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12856

研究課題名(和文) 欲望と差異の詩学—18世紀イギリス小説史の再構築

研究課題名(英文) Poetics of Desire and Difference: Reestablishing the History of the Eighteenth-Century Novel

研究代表者

武田 将明 (Takeda, Masaaki)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：10434177

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：イギリス18世紀の小説が、統御できない欲望への不安を様々な形で描いていることに注目し、この時代を代表する小説家が、それぞれ別の手法でこの問題に取り組んだことを、登場人物の名前の表記に注目することで論証した。また、上記の視点と最近の人類学の知見を組み合わせることで、一般的な文学史で小説に分類されない作品や、小説史の傍流に置かれている作品を組み込んだ、新しいイギリス小説史の構築への土台を築いた。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the uncontrollable desire commonly described in eighteenth-century British novels and showed how several famous novelists faced the fear of such desire and tackled this problem in different ways, analyzing the protagonists' names in their works. Combining these analyses with the latest theory in anthropology, moreover, this study lay the groundwork for establishing a new history of the British novel which reevaluates and incorporates many works that are either regarded as offshoots or disregarded as non-novels.

研究分野：18世紀イギリス小説を文学史の観点から再検討し、近代文学全般の理解を更新することを目指している。

キーワード：イギリス文学 18世紀小説 文学史 文学理論

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究開始前、すでに8年間にわたって科学研究費を獲得し、18世紀イギリス小説を文学史の観点で再考する作業を進めていた。若手研究(B) 英国小説史再考 1688年から1727年まで(2007-2008年度) 同 18世紀英国小説における匿名性とリアリズムの起源(2009-2010年度) 同 近代英国小説史における作者の身体表象の研究: 十八世紀を中心に(2011-2014年度)

(2) 上記の研究は、多くの研究論文によって発表されているが、とりわけ『群像』に連載された「小説の機能」では、研究応募時点ですでにデフォー『ロビンソン・クルーソー』とスウィフト『ガリヴァー旅行記』に関する論考が執筆され、研究開始とほぼ同時にリチャードソン『パミラ』に関する論考が発表された。

(3) デフォー『ロビンソン・クルーソー』の新訳(河出文庫)を2011年に上梓し、イギリス18世紀小説の嚆矢とされる本作への理解を深めていた。

(4) 2014年6月に刊行された『イギリス文学入門』(三修社)でイギリス18世紀小説関連の項目を執筆し、この時代の文学状況全般への知識を得ていた。

## 2. 研究の目的

### (問題設定)

(1) 近年、18世紀イギリス文学研究は、根本的な転換期を迎えている。これまで軽視されてきた Eliza Haywood など女性作家によるロマンスが注目を集め、などの研究により東洋を舞台にする説話文学の重要性が認識され、さらに などの研究から動物や物を主人公にするフィクション(It-narrative)も研究の俎上にあげられるようになった。

(2) 研究対象の急速な拡大に加え、この時代の文学(特に小説)研究で支配的だった、リアリズム中心の文学観への疑念も表明されている(、参照)。いまや、狭義のリアリズムを逸脱する「虚偽」や「贋作」といった観点を抜きにして、18世紀イギリス文学を論じるのは不可能である。

### (上記を踏まえた目的)

(1) このように拡大・解体の傾向を強める18世紀イギリス文学研究だが、この傾向を踏まえた新しい整理・統合の動きがまだ見られない。本研究は、欲望と差異という概念を鍵として、18世紀小説を分析することで、これまでリアリズム・非リアリズムで階層化されてきた小説研究を統合することを目指す。

(2) 加えて、これまで小説史のなかで傍流とみなされてきたゴシック・ロマンスや、小説との関連で読まれてこなかった虚偽の地誌をひとつの文学史に組み込むことで、旧来の小説研究では見えなかった新たな18世紀文学の地平を見出すことを目標とする。

(3) このように「近代文学」という概念を前提としない18世紀文学研究への道を切り開

くことは、イギリス文学研究にとどまらず、さまざまな国の近代以降の文学を再検討するのに有効であろう。例えば、19世紀後半から20世紀初頭にかけての近代日本文学にも、本研究の視点は応用可能である。このように、比較文学・世界文学研究の観点からも、本研究は役立つと思われる。

## 引用文献

Aravamudan, Srinivas. *Enlightenment Orientalism: Resisting the Rise of the Novel*. Chicago UP, 2012

Lamb, Jonathan. *The Things Things Say*. Princeton UP, 2011

Loveman, Kate. *Reading Fictions, 1600-1740*. Ashgate, 2008

Lynch, Jack. *Deception and Detection in Eighteenth-Century Britain*. Routledge, 2008

## 3. 研究の方法

(1) Defoe, Swift, Richardson, Fielding, Sterneらの小説における欲望(とそれが掻き立てる不安)は、登場人物の名前の表記の揺らぎに端的に示されている。制御できない欲望が小説テキストに行使する差異化の痕跡が、名前に刻まれているためである。これに注目し、18世紀小説の欲望と差異の詩学を構築する。

(2) 「研究の目的」で言及した研究など、18世紀イギリス文学の言説空間を再考する最新研究を取り込んで、欲望と差異の詩学の応用範囲を広げ、リアリズム中心の文学観を解体・再構成するような文学史を構築する。

(3) Viveiros de Castro, Latour, Strathernらによる近年の人類学研究は、表象に関する新たな見方を提供している。これを上述のリアリズム批判に組み込むことで、本研究をさらに発展させるための理論的な基盤とする。

## 4. 研究成果

(1) ローレンス・スターンの著作、とりわけ『トリストラム・シャンディ』(1759-67)について、新たな観点から分析し、文学史上の位置づけも再考した。では、『トリストラム・シャンディ』の世界を「仮名」(suspended name)という観念から分析し、そこでは現実が仮定の状態で宙吊りになり、登場人物は実在と非在の両義性のなかをさまよいつける。このとき、制御できない欲望は主体を解体する脅威ではなく、むしろ永遠の生成途上にある主体が活性化し、自己確認するための拠り所となっている。

スターンの文学観の基調をなす実在と非在の両義性は、18世紀の言説空間を席卷した虚偽や贋作との関連で歴史的に位置づけられる。では、この観点から『トリストラム・シャンディ』とジョナサン・スウィフトの文学、とりわけ『桶物語』(1704)との関連を考察した。

(2) ヘンリー・フィールディングの『トム・ジョウンズ』(1749)を「僭名」(pretended name)という概念で分析した(、参照)。僭名とは、名誉革命後にフランスに亡命したジェームズ二世の子孫に与えられた「王位僭称者」(Pretender)という呼称から取られたものである。『トム・ジョウンズ』は、偽の後継者プリフィルから真の後継者(当初は孤児として迫害される)トムへの正統性回復の物語と見なされてきたが、本研究ではそのような予定調和的解釈を退け、予定調和に見えるものが実は偶然の結果として描かれていることに注目した。『トム・ジョウンズ』が描くのは、むしろ正統性を保証する神が不在の世界、僭称者しかない世界である。この認識は、フィクションと現実の关系到根本的な変更をもたらした。すなわち、現実と並び立つ別世界として、フィクションの世界が認められるようになったのである。

以降、小説の目的は現実と自らを関連づけ、正統性をアピールすることから、小説そのものとして真実らしくあること(verisimilitude)へと変化する。つまり、本研究では、叙事詩的な視野の広さを備える19世紀小説の直接の先祖として『トム・ジョウンズ』が果たした役割を解明した。

(3) こうして「欲望と差異の詩学」と本研究が呼ぶ18世紀小説の特徴が体系化された。それは以下のように分類される。

分類	性質	代表作
虚名 imaginary name	名前への言及を回避し、欲望の主体を隠蔽/保護する。	デフォー『ロビンソン・クルーソー』(1719)
変名 variable name	名前の差すものを絶えず変化させ、最終的に名前を無化して欲望を消滅させる。	スウィフト『ガリヴァー旅行記』(1726)
実名 real name	欲望の対象を名指しすることで所有の幻想を得るが、完全な充足には至らない。	リチャードソン『パミラ』(1740)
仮名 suspended name	仮に名づけられた主体が、存在と非存在のあいだで欲望を抛り所に生き延びる。	スターン『トリストラム・シャンディ』(1759-67)
僭名 pretended name	正統性を喪失した名前が虚偽の世	フィールディング『トム・ジョウン

	界で偶然に 翻弄される。	ズ』(1749)
--	-----------------	----------

多くの18世紀小説は、この5つのいずれか(あるいは複数同時)に分類される。このうち「僭名」は、19世紀小説の多くを規定しているが、あまりに一般化したため、これまで本研究のような形で分類されることはなかった。この分類を20世紀小説に当てはめるとどうなるのか、また他の言語の小説に応用できるのかについては、今後の研究課題としたい。

(4) ダニエル・デフォーの『ペストの記憶』(1722)の意義を再考した(、参照)。17世紀に発生したペスト流行の実録に基づいたフィクションとされる本作だが、欲望が主体に与える不安という本研究の観点を応用すると、疫病の急襲を受け、パニックに陥った都市における自律性の限界を描いたものとして読むことが可能である。ならば、過去のペストは、現在のイギリスを活写するために援用されたとも言える。

こうした知見に基づき、また17、18世紀のロンドンの地図を参照しながら『ペストの記憶』を精読し、最新研究を踏まえた本書の新訳を上梓した。

(5) に収められた論考では、本研究で得られた知見を教育現場で伝えるために必要な方法を模索した。『ペストの記憶』と『トム・ジョウンズ』から短い一節を引用し、学生と一緒に分析しながら小説世界を動かす原理に迫るように工夫した。

(6) 2016年の北京大学での講演、および2017年の日本英文学会での研究発表において、ジョージ・サルマナザールの『台湾誌』(1704)とスウィフトの『慎ましやかな提案』(1729)を主に取り上げながら、18世紀の散文フィクションを独立した小説の集合ではなく、相互に補完しあう神話の星雲として捉え直す必要性を説いた。これは、リアリズムに基づいた18世紀小説観を批判する本研究の延長上にある発想で、理論的にはの著作など、最新の人類学に依拠したものである。かくして「欲望と差異の詩学」は、「小説の人類学」へと転回する。この視点は、ゴシック・ロマンスなど、近代小説の「傍流」にあるとされる作品を文学史的に再定義するのに有効であろう。

(7) 2015年9月より2016年3月までアメリカ合衆国に滞在し、ノエル・コレクション(ルイジアナ州立大学、ルイジアナ州シュリーヴポート)、ルイス・ウォルポール図書館(イェール大学、コネティカット州ファーマントン)、ホートン図書館(ハーヴァード大学、マサチューセッツ州ケンブリッジ)でリサーチ・フェローの資格を得て、18世紀イギリス

文学に関する資料収集を行った。具体的には、17世紀から18世紀における世界地図および地誌、同じ時期のロンドンの地図、18世紀の出版状況、ホラス・ウォルポール関連資料、ダニエル・デフォー関連資料、ジョージ・サルマナザール関連資料を徹底的に調べた。その成果は、本研究(とりわけ(4)-(6))に取り入れられた。

#### 引用文献

武田将明、小説の機能(4)『トリストラム・シャンディ』と留保される名前、群像、12月号、2015、72-111

武田将明、ローレンス・スターンの詩学、開文社、ローレンス・スターンの世界、2018、137-156

武田将明、小説の機能(5)『トム・ジョウンズ』と僞名の時空、群像、12月号、2016、118-153

武田将明、小説への誘い 小説の誕生、研究社、教室の英文学、2017、186-195

武田将明(訳・解説)、ダニエル・デフォー著、研究社、ペストの記憶、2017  
Viveiros de Castro, Eduardo. *Cannibal Metaphysics*. Translated by Peter Skafish. Univocal, 2014

#### 5. 主な発表論文等

##### 〔雑誌論文〕(計3件)

武田将明、非国教徒ダニエル・デフォーの市民的不服従 *The True-Born Englishman* から Anglo-Scottish Union まで、ヘンリー・ソロー研究論集、査読有、第43号、2017、33-45

武田将明、小説の機能(5)『トム・ジョウンズ』と僞名の時空、群像、査読無、12月号、2016、118-153

武田将明、小説の機能(4)『トリストラム・シャンディ』と留保される名前、群像、査読無、12月号、2015、72-111

##### 〔学会発表〕(計12件)

武田将明、“With such alterations as might satisfy the curiosity of the public”

George Psalmanazar, *The Description of Formosa* と十八世紀初頭の表象の臨界、(シンポジウム)身体・人種・人間 英語圏文学研究の人類学的転回、日本英文学会第89回大会、2017

武田将明、フィクションの彼方に—18世紀イギリス文学研究の最近の動向から、(シンポジウム)日本ジョンソン協会第50回大会シンポジウム 18世紀イギリス文学研究の過去・現在・未来 日本からの発信をめざして、日本ジョンソン協会第50回大会、2017

Masaaki Takeda, Curiosity and Credulity: George Psalmanazar's *The Description of Formosa* and the Problem

of Cultural Representation, PKU-UT 2017 Spring Institute, 2016.

Masaaki Takeda, “Somehow I Had Been Cheated by English Literature”: Natume Kinnosuke's Irritation and the End of Literary Theory, NTU-UTokyo Joint Conference, 2016.

Masaaki Takeda, Horace Walpole and Jonathan Swift, lecture at Lewis Walpole Library, 2016.

Masaaki Takeda, Fiction and the Glorious Revolution: Providence in Defoe's Writings, 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies, 2015.

武田将明、注釈と反復:『ガリヴァー旅行記』の意味作用、(シンポジウム)徹底討議:『ガリヴァー旅行記』の読みの可能性、日本ジョンソン協会第48回大会、2015

##### 〔図書〕(計9件)

武田将明、他、開文社、ローレンス・スターンの世界、2018、382 (137-156)

武田将明、他、白水社、知のフィールドガイド 分断された時代を生きる、2017、270 (10-24)

武田将明、他、研究社、教室の英文学、2017、334 (186-195)

武田将明(訳・解説)、ダニエル・デフォー著、研究社、ペストの記憶、2017、364

Masaaki Takeda, et al, London and Literature 1603-1901: A Festschrift in Honour of Professor Eiichi Hara, 2017, 161 (49-64)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

武田 将明 (TAKEDA, Masaaki)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号: 10434177